

ID	感染症(PT)	出典	概要
1	E型肝炎	IDWR. 27:34(2025)1-34	厚生労働省と国立健康危機管理研究機構国立感染症研究所が行った感染症発生動向調査によると、2025年第34週(8月18日~8月24日)に日本国内で報告された第4類感染症のうち、E型肝炎が5例確認された。その中で、東京都を感染地域とし、豚肉が感染源と特定された症例が1例報告されている。
2	E型肝炎	BULLETIN ZUR ARZNEIMITTELSICHERHEIT. https://www.bfarm.de/DE/Aktuelles/Publikationen/Bulletin/Ausgabe_n/2025/4-2025.pdf?_blob=publicationFile	<p>問題点: 原材料としてブタ膵臓を使用しているパンクレアチンを投与されたヒトにおいて慢性E型肝炎ウイルス感染が認められた。一部のパンクレアチンカプセルからHEV RNAが検出された。 【概要】生物由来成分の原材料中における一般的に存在が知られていないウイルスの検出に関する、新たに判明した感染経路の報告。</p> <p>疫学的研究により、パンクレアチンの使用と肺移植後の嚢胞性線維症(CF)患者におけるE型肝炎ウイルス(HEV)感染による慢性肝炎の発症との関連が示唆されている。新たなデータに基づき、パンクレアチンの使用とブタウイルスの感染による疾患リスクとの関連性を再評価した。</p> <p>カナダの研究 2024年のカナダにおける観察研究では、ブタ膵臓素を用いた補充療法は、肺移植を受けたCF患者における慢性HEV感染と関連している可能性が示唆された。本研究では、カナダの医療センターで治療を受けたCF患者における慢性HEV感染の最初の3例が報告された。3例とも生の豚肉製品や珍しい豚肉製品(例: 肝臓)の摂食歴を報告せず、肺移植後に輸血を受けていなかった。3例とも膵機能不全と記録され、パンクレアチンが投与されていた。ウイルスRNA検査により、カナダで承認されている4つの製品メーカーのパンクレアチンカプセルのうち44%がHEV RNA陽性であることが証明された。CF患者およびカプセル内から検出されたHEV RNAの系統解析により、患者3例のHEV RNAはHEV遺伝子型3に分類でき、長期膵臓素補充療法(PERT)カプセルおよび過去カナダのブタ群で確認されたHEV RNAと密接に関連していることが示された。しかし、分析上の課題(感染試験の欠如や製剤の自己分解等)により感染性E型肝炎ウイルスは検出されず、パンクレアチンカプセルによる感染経路の最終的な確認は得られなかった。CF患者においてHEV血清陽性率が異常に高く、パンクレアチンカプセルの大部分でHEV RNAが検出されたことから、医原性感染経路の可能性が示唆されるが、さらなる調査が必要である。</p> <p>フランスの研究 フランスで承認された2つのメーカーから59個のPERTカプセルが分析され、パンクレアチンカプセルの2/59(3%)でHEV RNAが検出された。本データはPERT患者のHEV感染リスクがPERTなしの患者と同程度であることを示唆しているが、PERTがHEVの伝播経路として果たす役割を否定することはできない。</p> <p>第2のカナダの研究 カナダの成人嚢胞性線維症患者コホートにおけるHEVの血清学的有病率を調査した。本コホートにおけるHEVの血清学的有病率は18.7%で、カナダ平均の5.9%の3倍であった。膵機能不全のためにPERTを受けた患者は、膵機能不全がなくPERTを受けた患者(6.7%)と比較してHEV血清陽性率(22.4%)が有意に高いことが示された。</p> <p>結論 ドイツ連邦医薬品医療機器庁(BfArM)は新たなデータに基づき、パンクレアチン(ブタ膵臓粉末)を介したウイルス伝播および潜在的感染のリスクを評価するための欧州シグナル手続きを開始した。EMAの医薬品安全性監視・リスク評価委員会(PRAC)からの勧告は2026年春に発表される予定である。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
3	ウイルス性髄膜 脳炎	N Engl J Med. 393(2025)1960-1962	髄膜脳炎患者におけるラッサウイルスに近縁なマンマレナウイルス 37歳の男性が、チャドのンジャメナにある保健センターに急性の後頭部頭痛、嘔吐、無力症を呈して来院しました。彼はフランスからチャドへ渡航し、3か月間滞在していました。主にンジャメナ地域に滞在し、短期間ウアダイ(アベシエ)およびボルクー(ファヤ・ラルジョー)地域にも滞在しました。発熱があり、項部硬直は認められませんでした。光恐怖を訴えました。臨床症状の詳細は補足付録の表S1に記載されています(全文はNEJM.orgで閲覧可能)。症状発症から5日後、彼はフランスに送還され、神経科病棟に入院しました。症状発症から7日後に混乱とけいれんが出現し、集中治療室に移されました。臨床的改善により12日目に挿管解除が可能となりましたが、意動緩慢と測定障害は持続しました。26日目に神経学的欠損なく退院しましたが、15日後に髄膜脳炎の後遺症を示す四室交通性水頭症と経髄吸収が発症し、心室腹腔シャントの設置に至りました。診断アッセイは陰性でした。メタトランスクリプトミクス解析により、症状発症から9日後に採取された脳脊髄液サンプルからラッサウイルスと同定された配列が確認されました。配列は小(S)セグメントの100%、大型(L)セグメントの98%をカバーし、それぞれ77.3%と75.0%の相同性を持ち、最も近いラッサウイルス配列(GenBank登録番号PV737787およびPV737788)と一致しました。ウイルスRNAは、症状発症から6日目および8日目に採取した脳脊髄液サンプルで、旧世界マンマレナウイルスのコンセンサス配列を用いたRT-PCRアッセイにより検出されましたが、6日目および22日目に採取した血漿サンプルや22日目に採取した尿サンプルでは検出されませんでした。ラッサウイルス特異的IgMおよびIgG抗体が血漿中に検出されました。脳脊髄液からウイルスを単離し、複製速度論の解析が行われました。透過電子顕微鏡写真では、マンマレナウイルスに典型的な球状粒子やリボソームの存在が確認されました。22日目に得られた血漿はウイルスを中和しました(希釈率1:50)。ゲノムシーケンスにより、SセグメントおよびLセグメント配列はマンマレナウイルス属に属し、他の種よりもラッサウイルスに近いことが示されました(GenBank登録番号PV749900およびPV749901)。単離ウイルスは、核タンパク質、Lおよび糖タンパク質前駆体コード配列において、ラッサウイルス系統と84.8%から86.6%の相同性を持っていました。他の旧世界マンマレナウイルス種と比較して、このウイルスは核タンパク質配列と56.9%から75.4%、L配列と42.3%から59.4%、糖タンパク質前駆体配列とは39.8%から78.3%の相同性を持っていました。ラッサウイルス系統との相同性レベルはSセグメントで74.6%から75.5%、Lセグメントで66.7%から67.2%でした。このウイルスはSセグメント配列と50.5%から68.3%、他のマンマレナウイルス種のLセグメント配列と48.8%から59.3%の相同性を持っていました。チャドではラッサウイルスは検出されておらず、このケースのウイルス拡散の臨床症状やパターンはラッサ熱の症例には典型的ではありませんでした。しかし、ンジャメナはラッサウイルスの最も有病率が高い国であるナイジェリアに近接しており、ラッサウイルス感染の臨床症状は主に髄膜脳炎であり、ウイルスが脳脊髄液中のみで検出されることが少数の患者で報告されています。ゲノムデータは、このケースのウイルスが既知のラッサウイルス系統に属さないことを示しました。我々は、このデータをマンマレナウイルス属の新種を割り当てる基準と比較しました。このウイルスと他のマンマレナウイルスの間で、SセグメントおよびLセグメントにおけるヌクレオチド配列同一性のレベルは、それぞれ80%未満と76%未満(観察値は75.5%および67.2%)でした。このウイルスは明確な地域で検出され、疾患と関連し、他のマンマレナウイルスと共有する核タンパク質アミノ酸の88%未満(最も近い核タンパク質配列と86.6%共有)でした。健康な成人における疾患の重症度は、このウイルスが病原性を持つ可能性を示唆していますが、この患者の接触者間での感染の証拠は見つかりませんでした。結論:我々はチャドで新たな病原性マンマレナウイルスの出現を報告しました。今後の研究では、このウイルスの細菌類内での循環を調査し、ウイルスの貯蔵庫を特定することが期待されます。
4	ウイルス感染	Vet Microbiol. 309(2025)110686	メタゲノム研究によってダニから初めて発見されたJingmenvirus群は、フラビウイルス科と相同性を共有するがそのゲノム構造はかなり異なる。Jingmenvirusの大部分はヒトでは検出されていないが、例外的にAlongshanウイルス(ALSV)は2017年に中国北東部でマダニに咬まれた後に発熱性疾患と非特異的症状を呈したヒトで最初に同定された。ALSVは東アジア、ロシア、ヨーロッパの節足動物とウマを含む様々な哺乳類で検出されているが、これらの地域よりも広い範囲にALSVが広がっている可能性がある。本研究では別の大陸のウマ集団におけるALSVの血清陽性率と地理的分布を調べるため、市販のウマ血清プールのALSV血清陽性を調べた。さらに、十分に特性評価されたサラブレッド競走馬のコホートと、5年間縦断的にサンプリングされたウマのコホートで血清陽性の調査を行った。北米、南米、ヨーロッパ、ニュージーランドのウマ集団から採取された13の市販のウマ血清プールでルシフェラーゼ免疫沈降アッセイを行った結果、ブラジルのウマ胎児由来の血清を除く12のプールでALSV感染の既往を示す抗体の存在が示された。北米とニュージーランドでは初めて抗ALSV抗体が検出された。全ての血清プールでALSV RNAは検出されなかった。すでに綿密にモニタリングされており、年齢、性別、輸送、ワクチン接種、所在地に関する情報が入手可能であるドイツ北部と西部のサラブレッド競走馬のコホート(473頭)では、87.1%がALSV血清陽性であった。ALSV RNAは検出されなかった。血清陽性は年齢との相関が認められ、他の因子との相関は認められなかった。5年間縦断的にモニタリングされたドイツの124頭のウマのコホートでは、ALSV血清陽性率評価が5回行われた。血清陽性であった個体がその後の検査で陰性化することがあり、血清陽性が認められた個体は89頭(71.7%)で、各検査での血清陽性率は38-58%であった。ALSV RNAは検出されなかった。本研究の結果は広範囲に及ぶALSVの存在、地域の繁殖コホートのウマにおけるALSV抗体の高い血清陽性率を明らかにした。

ID	感染症(PT)	出典	概要
5	ウイルス感染	Virol Sin. 40(2025)860-862	Tusavirus (TuV)は2014年にチュニジアの下痢の小児において初めて報告され、それ以降ヒトと動物の糞便試料から散発的に検出されており、人獣共通感染症の可能性が懸念されている。ここでは、中国内モンゴル自治区東部の下痢症の仔牛の腸組織からTuV株が初めて同定されたことを報告し、種間伝播の可能性を裏付けるゲノム解析結果を提示する。中国内モンゴル自治区東部の下痢で死亡した仔牛とブタから採取した腸組織試料中のDNAウイルスの存在を調べるために、プールの組織試料で次世代シーケンシング(NGS)を実施した結果、いくつかのウイルス種とその相対的存在量が明らかとなった。また、TuVに対応するDNA断片が2つ同定された。TuVの存在を検証するためプール前の個々の組織試料でネステッドPCRを行った結果、TuV陽性だったのは22点の試料のうち下痢で死亡した仔牛の腸組織試料だけであった。さらに内モンゴル自治区東部のTuV感染率を調べるため、2022-2024年に下痢で死亡した仔牛から採取した30点の腸組織試料でネステッドPCRを行ったが、TuV陽性試料はなかった。NGSで最初に同定されたTuV株(NM21C6と命名)の完全なコード配列を得るため4つの重複するプライマーペアが設計され、最終的に全体で4424ヌクレオチドに及ぶ完全なコード配列が再構築された。NM21C6株の配列は、イギリスの疥癬性口唇病変を呈した生後6か月の仔羊(体重減少と下痢のエピソードあり)から分離されたTuV株とのヌクレオチド同一性が最も高かった(98.3%)。3つの遺伝子に基づく系統発生解析では、NM21C6株とイギリスのヒツジ由来株の強固なクラスター形成が認められた。ヌクレオチド同一性と系統発生解析の結果は、これらの株に最近の共通祖先が存在するか、直接的進化のつながりがあることを示唆した。異なる宿主種(ウシとヒツジ)と、地理的に離れた場所(中国と英国)にまたがるこの密接な遺伝的関連性は、TuVの種間伝播を支持する説得力のあるゲノム証拠を提供する。この種間伝播の可能性は、非常に近縁なヒト株の検出によって暗示される人畜共通感染症リスクを強調する。本研究の結果は、TuVの宿主範囲が拡大されウシが含まれることを示し、ウシ由来TuV株の完全なコード配列を初めて提供した。動物集団におけるTuVの感染率、伝播経路、病原性、ヒトの健康に対する潜在的な影響を評価するために、さらなる血清学的調査と疫学的調査が必要である。
6	ウシ結核	Zoonoses Public Health. 72(2025)369-378	人獣共通結核(TB)は、ヒトにおける結核疾患の一種で、ウシにおける結核の主な原因であるウシ型結核菌(M. bovis)の感染によって引き起こされることが多い。ウシからヒトへのM. bovis感染は、汚染された未殺菌牛乳や乳製品、生肉の摂取、あるいはエアロゾルを介して発生する可能性があり、ヒトからヒトへの感染も起こり得る。1999年から2021年の間に、培養検査で確認されたヒトのM. bovis感染症例が505例あり、その数は2017年まで増加した。本研究では、イングランドで結核に感染したウシに曝露した人々におけるM. bovis感染の有病率を推定し、この集団における潜在性結核感染症(LTBI)に関連するリスク要因を特定することを目的とした。我々は英国農業コミュニティのメンバーと共同で、牛結核の高リスク地域であるイングランド南西部において後ろ向きコホート研究を実施した。質問票を用いて、参加者の特徴、行動、および農業活動を把握した。過去の牛群検査データと関連付けて、参加者を結核曝露の低、中、高リスクに分類した。我々は農業展示会および単独イベントで90名の参加者を募集した。参加者の内訳は、農家/農場労働者(90名のうち76名)と獣医療従事者(90名のうち10名)であった。年齢の中央値は45.5歳(IQR:19~77歳)、男性は63%、BCGワクチン接種歴は67%であった。M. bovisへの曝露は、感染牛との直接接触および生乳の摂取によるものであった。結論として、本研究では、英国において結核感染牛を扱う作業員におけるLTBI陽性率が低いことが明らかになった。本研究結果は、ヒトにおけるM. bovisの自然経過に関する知見が限られていることを浮き彫りにしており、今後の研究ではM. bovis陽性症例およびM. bovis曝露者について詳細な追跡調査を実施し、曝露から活動性疾患への進行速度を明らかにする必要がある。
7	エムボックス	GOV.UK. https://www.gov.uk/government/publications/outbreaks-under-monitoring-in-2025/outbreaks-under-monitoring-in-week-42-week-ending-19-october-2025--2	監視対象の発生状況:第42週(2025年10月19日までの週) Mpox(クレードI):2025年疫学第42週(2025年10月13日から19日)に、米国および欧州において、クレードI Mpoxが流行していることが知られている地域への渡航歴のない、クレードI Mpoxの症例が初めて報告された。2025年10月14日、カリフォルニア州ロングビーチ市でクレードI Mpoxの症例が確認された。これは米国における7例目のクレードI Mpox症例であり、渡航歴のない症例としては初めてのものである。市保健局は、症例の潜在的な感染源を調査し、接触者追跡を行っている。2025年10月16日、ロサンゼルス郡公衆衛生局は、最近の渡航歴のない成人において、クレードI Mpoxの新たな確定症例が報告されたと報告した。カリフォルニア州公衆衛生局(CDPH)は2025年10月17日、最近の海外渡航歴のないクレードI Mpox症例3例が検出されたとする公衆衛生勧告を発出した。クレードの亜型は特定されていない。これらの症例は疫学的に関連性があるとは述べられていない。3例とも、ゲイ、バイセクシュアル、その他の男性同性愛者(GBMSM)コミュニティ内で検出された。CDPHは、カリフォルニア州および米国の住民に対するクレードI Mpoxの全体的な公衆衛生リスクは引き続き低いと述べている。
8	チクングニアウイルス感染	Lancet Infect Dis. 25(2025)e551	○中国、チクングニアのアウトブレイクを報告 2025年6月から8月にかけて、中国で約8,000例のチクングニアウイルス感染症が報告され、同国史上最大のアウトブレイクとなった。症例の大半は広東省に集中し、特に仏山市順徳区で全体の約90%が確認されている。死亡例は報告されておらず、ほとんどの患者は軽症であった。臨床的には、発熱(86.8%)、関節痛(81.4%)、発疹(65.5%)が主要症状であり、約半数の患者でこれら3症状が併発した。このアウトブレイクは男女ほぼ同じ比率で、あらゆる年齢層に影響を及ぼしている。症状を呈した住民は病院での検査を強く促され、陽性者は院内で隔離され蚊帳の使用が義務付けられた。急増する症例に対応するため、地方当局は媒介生物対策を強化した。住民には自宅周辺の淀んだ水源を除去するよう指示され、違反者には罰金が科された。さらに、幼虫を捕食する魚の放流や、他種を捕食する蚊の放出といった対策も導入された。WHOは各国がワクチン開発のために官民連携を奨励すること、包括的な疾患マッピングと国家戦略の策定を支援するための資金の確保、迅速診断検査の開発、効果的な媒介生物抑制のためのエビデンスベースの強化、蚊の生息地を減らし安全な貯水法を広めるための環境部門や技術者との協力を推奨している。
9	デング熱	WHO ホームページ. https://iris.who.int/server/api/core/bitstreams/4a449d95-dab0-4e81-8e3d-5d233447d264/content	デング熱、世界の状況、サーベイランスと進捗—2024年の最新情報: 2024年にアフリカ地域では15万7000件のデング熱症例が報告され過去数年と比べて著しい増加を示した。アメリカ地域では2024年にデング熱の伝播が前例のない急増を見せ2023年に報告された既に高い水準を大幅に上回った。東南アジア地域では流行曲線が上半期にわたり着実に上昇し特に8月から11月にかけてのモンスーン期に急激な増加を示した。東地中海地域ではアメリカ大陸や東南アジアに比べ依然として低いものの、気候や生態系の変化、急速な都市化、そしてこれまで非流行地域であった地域へのネッタイシマカの拡散により、デング熱の脅威は顕著に増加した等、世界中でデング熱が前例のないレベルで伝播している。

ID	感染症(PT)	出典	概要
10	ブルセラ症	Vet World. 18(2025)2733-2745	ブルセラ症は公衆衛生と経済に重大な影響を及ぼす世界的に重要な人畜共通感染症である。宗教的制限によりイラクでは家畜ブタが存在しないが、野生ブタ(<i>Sus scrofa</i>)は <i>Brucella suis</i> を含む人畜共通病原体の潜在的保有宿主である。イラクでは <i>B. suis</i> の血清陽性率、分子検出、系統発生的特性評価は研究されておらず、研究はウシ、スイギュウ、ヒツジ等の動物における他のブルセラ種(<i>B. abortus</i> , <i>B. melitensis</i> , <i>B. ovis</i>)に焦点を当てており、野生ブタの疫学的役割は無視されている。本研究ではイラクの野生ブタにおける、ELISAによるブルセラ症血清陽性率の算出、ブルセラ症と関連する危険因子(年齢、性別、地域)の評価、分子的検出による感染の確定と分子的陽性率の算出、系統発生解析による分離株の特性評価を目的とした。2022年9月-2024年1月にイラクのWasit州で、3時間以内に殺処分された野生ブタの静脈血試料(n=42)を採取し、年齢(菌の萌出と推定摩耗量に基づく)、性別、採取地域を記録した。ELISAを用いて血清をスクリーニングし、DNAを抽出して通常のPCRと定量的リアルタイムPCR(qPCR)で16SリボソームRNA遺伝子を標的として検査した。 <i>B. suis</i> 分離株の配列を決定し、系統発生解析を用いてGenBankの参照株と比較した。危険因子との統計的関連性はオッズ比および相対リスクを用いて評価した。ELISAでは54.76%の試料から抗 <i>Brucella</i> 抗体が検出され、ELISA実施後の陽性試料と陰性対照の光学濃度値から算出した阻害率に基づき、陽性試料は軽度(39.13%)、中等度(34.78%)、重度(26.09%)の感染に分けられた。PCRでは33.33%、qPCRでは45.24%の試料から <i>B. suis</i> DNAが検出された。血清陽性率は2-4歳のブタ(73.33%)が2歳未満(38.1%)、4歳以上(66.67%)よりも高く、雌(57.58%)が雄(44.44%)よりも高く、地域ではAl-Numaniyah(73.68%)が最も高かった。系統解析の結果、インドの <i>B. suis</i> 株(MF173089.1)と98.7%-99.76%の同一性が認められた。本研究はイラクの野生ブタにおける <i>B. suis</i> の分子的証拠を初めて提供し、人畜共通感染症の潜在的保有宿主としての役割を強調した。リスク因子分析では2-4歳、雌、Al-Numaniyahで血清陽性率が有意に高いことが明らかになり、疫学的ホットスポットと集団を標的としたモニタリングが必要であることが示唆された。この持続的な人畜共通感染症の脅威を制御するためには、分野横断的な協力と分子診断への投資の強化が鍵となる。
11	ヘリコバクター菌血症	ASM case reports. 1(2025)00002	養豚農家における人獣共通感染を示唆する <i>Helicobacter troglodytes</i> による菌血症:症例報告 41歳の女性が、突然の頭痛、悪心、全身倦怠感、悪寒、発熱を主訴に当院救急外来を受診しました。既往歴に特記すべきことはなく、彼女は1,000頭以上の豚を飼育する豚農場で勤務しており、母豚や子豚の世話(給餌や糞処理など)を直接行っていました。入院時、明らかな異常は認められませんでした。グラスゴー・コーマ・スケール(GCS)はE4V4M6で、混乱や見当識障害はありましたが、質問には応答可能でした。頭部硬直およびケルニヒ徴候は陰性でしたが、ジヨルトサインは陽性であり、髄膜炎の可能性は否定できませんでした。救急外来受診後12時間で、好気性および嫌気性血液培養を2セット採取しました。髄液(CSF)検査では、髄液は水様・無色で、初圧は24 mmHg、細胞数は1/μL、総蛋白は32mg/dL、グルコースは54mg/dLでした。末梢血では、白血球数が15,630/μL、好中球割合は91.6%、C反応性蛋白(CRP)は0.25mg/dL、プロカルシトニン(PT)は0.22ng/mLでした。単純CT検査では、回盲部に小さなリンパ節を認めました。したがって、当初は髄膜炎または菌血症を疑い、静脈内投与にてセフトリアキソン 2gを12時間ごとに7日間、バンコマイシン 1gを12時間ごとに5日間、アシクロビル 250mgを8時間ごとに4日間投与しました。入院6日目に、2セットの血液培養のうち1ボトルでグラム陰性菌が検出されました。しかし、培養陽性になるまでに時間がかかり、かつ1セットのみの陽性であったため、当初はコンタミネーションと判断されました。患者は症状が改善し、入院9日目に退院しました。髄液中の結核菌PCR検査および水痘帯状疱疹ウイルス抗体検査は陰性であり、結核菌を含む髄液培養も陰性でした。血液培養で検出された菌について、さらに詳しく検討しました。血液培養は2セット中1セットの好気性ボトルのみが98時間後に陽性となりました。陽性となった血液培養液のグラム染色では、紡錘形のグラム陰性菌が確認されました。分離菌は、サブカルチャー後4日でスワーム形成を形成し、オキシダーゼおよびカタラーゼ陽性でした。この分離菌(NHP16-4001と命名)の同定をさらに進めるため、全ゲノムシーケンス(WGS)をMiniSeqプラットフォームで実施しました。NHP16-4001の16S rRNA遺伝子は、以下の6種の <i>Helicobacter</i> 属菌と97%の相同性を示しました: <i>H. equorum</i> , <i>H. kumamotoensis</i> , <i>H. troglodytes</i> , <i>H. pullorum</i> , <i>H. canadensis</i> , <i>H. colisuus</i> 。16S rRNA遺伝子の系統解析により、NHP16-4001は <i>H. troglodytes</i> に最も近縁であることが分かりました。さらに、腸肝 <i>Helicobacter</i> 種間の平均ヌクレオチド同一性を算出したところ、NHP16-4001は <i>H. troglodytes</i> ATCC700114Tと97.5%の同一性を示しました。この値は、種同定に用いられるカットオフ値(95%)を上回っていました。したがって、血液培養から分離されたNHP16-4001株は <i>H. troglodytes</i> であると判定されました。退院後も、37.2~37.6°Cの微熱と頭痛が続いたため、入院15日目に再度当院を受診しました。しかし、末梢血の白血球数は9,550/μLに改善しており、好中球割合は69.0%、C反応性蛋白(CRP)も0.03mg/dLに改善していました。これにより、菌血症は治癒したと考えられました。さらに、退院16か月後の受診時にも再発は認められませんでした。私たちは、豚農場で勤務する41歳女性の菌血症症例を報告します。本症例の起原菌は <i>H. troglodytes</i> であり、感染臓器は特定できず、最終的に菌血症と診断されました。菌血症の発症は、患者が農場で豚糞に接触したと関連していると考えられます。 <i>H. troglodytes</i> 感染は人獣共通感染症の可能性があるので、最終的な結論を出すにはさらなる症例報告が必要です。
12	リケッチア症	Open Vet J. 15(2025)4949-4961	<i>Anaplasma</i> 種と紅斑熱群リケッチアは主にマダニ類によって動物宿主に伝播され、疾患を引き起こす。病原体と認識される7種の <i>Anaplasma</i> のうち5種はヒトの疾患を引き起こすことがある。 <i>Candidatus Rickettsia jingxinensis</i> は2016年にダニから発見された紅斑熱群リケッチアで、人獣共通感染症のリスクがあるが、反芻動物に関する報告は少ない。家畜におけるこれらの病原体の感染を理解することは、潜在的なスピルオーバーリスクを評価し、公衆衛生介入のための情報を得るのに重要である。本研究では中国貴州省徳江県のウシ119頭、ヤギ51頭の血液試料を収集し、PCRによる <i>Anaplasma</i> 種と <i>Ca. R. jingxinensis</i> の検出、検出された遺伝子型の系統樹構築を行った。119頭のウシのうち35頭が <i>Anaplasma</i> に感染し(29.41%)、 <i>A. capra</i> , <i>A. bovis</i> , <i>A. marginale</i> の感染率はそれぞれ9.24%、17.65%、26.89%であった。51頭のヤギのうち42頭が <i>Anaplasma</i> に感染し(82.35%)、 <i>A. capra</i> , <i>A. bovis</i> の感染率はそれぞれ62.75%、66.67%であった。 <i>A. marginale</i> に感染したヤギはいなかった。さらに、4頭のウシ(3.36%)が <i>Ca. R. jingxinensis</i> に感染していた。ウシではこれらの病原体による二重感染と三重感染が、ヤギでは二重感染が検出された。系統発生解析では地域による <i>A. bovis</i> の違いが明らかになり、異なる循環株が存在することが示唆された。アナプラズマ症はこの地域の反芻動物、特にヤギで非常に蔓延している。病原体種の分布は宿主によって異なり、 <i>A. marginale</i> はウシに対して宿主特異性を示した。 <i>Ca. R. jingxinensis</i> はネコ、イヌ、センザンコウ、ヒトで検出されており、ヒトでは発熱、紅斑、痂皮と関連する可能性がある。本研究ではウシにおける <i>Ca. R. jingxinensis</i> 感染を初めて分子的に検出し、これは宿主範囲の拡大を示唆している。潜在的なスピルオーバーリスクと公衆衛生上の脅威を考慮すると、本研究の結果はこれらの病原体に対する強化されたサーベイランスと制御手段の必要性を強調する。

ID	感染症(PT)	出典	概要
13	リーシュマニア症	Emerg Infect Dis. 31(2025)1838-1842	<p>リーシュマニア症はいくつかのLeishmania 種原生動物寄生虫によって引き起こされる、比較的稀なウマの疾患である。地中海ヨーロッパでは、動物とヒトのリーシュマニア症は主にL. infantumによって引き起こされる。2002-2010年にはL. infantumベクターの存在量が少ないため非流行地域であると考えられていたアルプス山脈北部で、L. martiniquensisによるウマとウシのリーシュマニア症症例が報告された。L. martiniquensisはカリブ海のヒト内臓症例から報告された人獣共通感染種であるが、完全な宿主範囲と疫学は不明なままである。ここではL. martiniquensisによるウマの皮膚リーシュマニア症4症例について報告する。</p> <p>2019-2023年に、4頭のスポーツ馬でL. martiniquensisが同定された。症例1は、チェコ共和国、Brnoの獣医科大学の獣医学診療所入院した4歳のAkchal-Teke牝馬で、左上眼瞼に数個の小結節(3-10 mm)が認められた。症例2はチェコ共和国の大規模牧場の5歳のKladruher牝馬で、下眼瞼付近の顔面に片側性に小結節(5-15 mm)が認められた。症例3はオーストリア、Viennaの獣医科大学の獣医学診療所で獣医の診察を受けた5歳のFjord牝馬で、下眼瞼、胸部、乳房に結節性病変が認められた。症例4はチェコ共和国北西部に住む12歳の去勢馬で、左顔面領域の病変を主訴に来院した。症例4の臨床症状は症例1-3と類似していた。各症例の皮膚病変から採取した生検試料の顕微鏡検査で細胞質内にLeishmania無鞭毛体が認められ、PCRでL. martiniquensisと同定された。</p> <p>ドイツとスイスで最後にL. martiniquensis症例が発表されてから約10年後に、ヨーロッパにおけるリーシュマニア症(通常はL. infantumによって引き起こされる)の既知の流行範囲の外で発生した、4症例のウマL. martiniquensis感染を報告する。症例間の関連性は証明されず3年を超える期間にわたって発生し、中央ヨーロッパに地理的に分散していたことから、ウマがL. martiniquensisの保有宿主として無視できない役割を果たすことが示唆された。4症例とも当初はウシバピロウマウイルスによるサルコイドと疑われ、症例1と3ではウシバピロウマウイルス1型と2型が検出されたことから、サルコイド様病変とLeishmania感染との関連が示唆された。人獣共通感染症の可能性を考えると、ウマ皮膚病変の症例では細胞診、PCR、配列決定を組み合わせ、この病原体について広く調査されるべきである。</p>
14	二核アメーバ感染	Acta Parasitol. 71(2026)6	<p>Enterocytozoon bienersiは500以上の遺伝子型が同定されている微胞子虫で、一部の遺伝子型は人獣共通感染能力を有している。牛乳試料中のE. bienersiの存在を記録した報告はほとんどない。Coxiella burnetiiはQ熱を引き起こす人獣共通病原体で、世界中で広がっている。伝播経路はエアロゾル、節足動物ベクター、汚染された生乳・乳製品の摂取とされているが、統一見解はない。系統的研究では、牛乳試料とチーズ試料中のC. burnetii陽性率はそれぞれ10.7-76.9%と4.3-85.0%の範囲であると報告されている。Dientamoeba fragilisは宿主の腸管に定着する腸内単細胞寄生虫で、様々な胃腸症状と関連しているが、健康な人では無症候性の保菌が一般的である。病原性には議論の余地があるが、人獣共通感染の可能性が認識されている。ヒト、イヌ、ネコ、セキセイインコ、節足動物ベクターなどの多くの宿主に蔓延しているが、牛乳や乳製品中のD. fragilisの存在を明らかにした研究はない。本研究ではトルコの生乳、乳製品試料においてこれら3種の病原体の分子的分出を行い、E. bienersiとD. fragilisの遺伝子型を特定した。</p> <p>2025年4-6月にトルコ、Kirsehir州の青空市場、デリカテッセン、農場から生乳試料(牛乳、ヒツジ乳、ヤギ乳)、牛乳チーズ試料計150点を収集した。試料からDNAを抽出し、特定の遺伝子領域のPCRによる増幅、公表済み配列データとの比較による病原体の同定、E. bienersiとD. fragilisの系統樹構築を行った。E. bienersi陽性率はヒツジ乳で5.7%(2/35)、牛乳チーズで3.3%(1/30)であった。C. burnetii陽性率は牛乳で14.0%(7/50)、ヒツジ乳で8.5%(3/35)、牛乳チーズで10.0%(3/30)であった。D. fragilis陽性率は牛乳で14.2%(5/35)、ヒツジ乳で8.5%(3/35)、牛乳チーズで3.3%(1/30)であった。E. bienersi分離株、D. fragilis分離株は、世界各地の多様なソースに由来する分離株と100%の配列類似性を示した。</p> <p>本研究では牛乳、ヒツジ乳、牛乳チーズで初めてD. fragilisが検出され、牛乳チーズで初めてE. bienersiが検出された。生乳と乳製品がこれらの寄生虫の伝播において重要な役割を果たす可能性が示唆された。</p>
15	包虫症	J Helminthol. 99(2025)e82	<p>Echinococcus equinusは主にウマとイヌの中で維持される寄生条虫であり、ウマ、ロバ、ラバ、その他の有蹄動物が中間宿主となる。E. equinusは歴史的に人獣共通感染症ではないと考えられてきたが、2021年にヒトにおける最初のE. equinus感染確定症例がトルコで報告され、E. equinusの実際の人獣共通感染性について重大な疑問が提起された。トルコではE. equinusの症例は稀であるが、近年、様々な動物におけるこの寄生虫の存在の分子的分出が得られている。本研究の目的はトルコのウマ類におけるE. equinusの存在と分子特性を調べることであった。</p> <p>2020-2025年にFirat大学獣医学部で実施された52頭のウマ類の剖検で包虫嚢胞の存在を調査した。肉眼的および病理組織学的検査により、特徴的な構造的特徴を示す包虫嚢胞の存在がロバ2頭の肝臓、アラビア馬1頭の肺で確認された。検出された個々の包虫嚢胞の胚膜を切除し、分子解析のために70%エタノールで保存した。分子同定はミトコンドリアのチトクロームcオキシダーゼサブユニット1(mt-COI)遺伝子を標的としたPCR増幅により行われた。宿主内変異を評価するために複数の嚢胞(最大でロバ1頭から14個)で配列解析を行い、3頭のウマ類由来の陽性試料全てがE. equinusであることが確認された。系統学的解析により、得られた配列と他の地理的地域由来の参照E. equinus株との間に密接な近縁関係があることが示された。これらの知見は、トルコのウマ類におけるE. equinusの分子的分出を提供し、この寄生虫の分布に関する限られた知識に貢献する。今後の研究は、特にイヌ類終宿主が蔓延している地域におけるE. equinusの疫学、病理、伝播動態の解明に焦点を当てるべきである。</p>
16	大腸菌性胃腸炎	ProMED-mail 20251201.8729137	<p>アリゾナ・ステート・フェアへの旅行が、16歳の女性にとって恐ろしい医療緊急事態へと変わった。彼女は重篤な感染症を発症し、約4日間入院したと語る。女性とボーイフレンドは2025年10月26日にフェアを訪れた。彼女は数日後に入院し、フェア内のふれあい動物園で豚を撫でたことが原因だと考えている。医師は動物に存在する特定の大腸菌株に共通する毒素である志賀毒素を産生する感染症と診断した。「これはかなり深刻な事態だと直感し、すぐに治療と検査が必要だと判断した」と母親は語った。2025年11月13日、アリゾナ州保健局(ADHS)は10月の大腸菌症例が2倍に増加したと報告する健康勧告を発表した。ADHSは増加傾向を調査中であることを確認したが、具体的な感染源については公に特定していない。アリゾナ州フェア事務局は声明を発表し、州および地方当局が複数の大腸菌症例を特定したことを認めた。フェア側は当局と協力し、進行中の調査を支援するため情報を提供していると述べた。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
17	皮膚炭疽	WHO ホームページ https://www.who.int/emergencies/disease-outbreak-news/item/2025-DON573	2025年5月1日から4日の間に、タイのMukdahan県(ラオスとの国境付近)において皮膚炭疽の確定症例4例(1例の死亡を含む)が特定された。確定症例の年齢範囲は36歳から58歳で、男性3例と女性1例であった。全症例がウシの屠殺作業に疫学的に関連していた。最初のウシは2025年4月12日に功德を積む行事中に屠殺され、その肉は村人に配布された。2025年4月28日には2頭目のウシが屠殺された。全症例でこれらの動物の屠殺過程における肉への曝露や接触が感染源だと考えられている。最初の症例は右手に発疹を呈し、それは4月24日までに明確に視認される病変に進行した。患者は病変の黒化、右腋窩リンパ節腫脹、浮動性めまい、痙攣などの臨床症状の悪化により、4月27日に紹介病院へ転院したが、疾患の合併症の結果として同日に死亡した。その他の3例は膿疱性および水疱性病変を呈し入院した。2025年5月28日現在、3例はレボフロキサシドとドキシサイクリンの10日間投与を完了して退院した。炭疽菌は4例全例でRT-PCRにより確認された。計636人が感染リスクありとして2025年5月10日まで監視下に置かれたが、そのうち28人が直接屠殺に関与し、その他の人々は生の牛肉を消費していた。リスクの高い人々に対する曝露後予防としてドキシサイクリンが7日間投与された。5月28日にはウシの屠殺に関連したMukdahan県での5例目の確定症例が発表された。本件は、1994年以来タイで初めて報告された炭疽菌関連の死亡となった。保健省疾病対策局および農業・協同組合省畜産振興局は、潜在的な疾病拡散を抑制するために、最初の症例が使用したナイフとまな板、ならびに屠殺現場の土壌と屠殺されたウシの肉からサンプルを採取した。全て炭疽菌陽性であった。
18	真菌感染	第74回日本感染症学会東日本地方会学術集会・第72回日本化学療法学会東日本支部総会合同学会(2025/09/24-2025/09/26)O13-3	問題点:日本においてCunninghamella polymorphaによる初めてのヒト感染例が確認された。 【概要】新たにヒトにおいて感染することが認められた感染症に関する報告 【症例】60代男性 【併存疾患】高血圧 【経過】 再燃を繰り返すB細胞性急性リンパ球性白血病に対し、3カ月前から二重特異性T細胞誘導抗体療法が導入され、2サイクル目投与目的に入院した。予防内服はST合剤、ACV、FLCZを継続した。Day11から全身の疼痛と倦怠感、Day12に体幹の淡い紫斑を認めた。Day13に酸素化が悪化し、胸部CTで肺炎像を認めCFPMを開始した。Day14、意識レベルが低下し、紫斑が境界明瞭な円形となった。抗真菌薬をVCM+MEPMIに変更、MCFGを開始した。Day15、共同偏視が出現し、頭部単純CTで脳実質の多発低吸収域を認めた。抗真菌薬をL-AmBに変更するも、同日死亡した。剖検は実施できなかったが、皮膚組織の病理で多数の菌糸を認め、培養からC. polymorphaが検出された。血液培養の培養液をサブロー培地に塗布したものからAureobasidium pullulansが検出されたが、皮膚組織からは検出されなかった。C. polymorphaの各種抗真菌薬に対するMICはいずれも高値であった。 【考察】 検索する限りC. polymorphaによるヒトの感染症の報告は過去にないが、特徴的な紫斑や経過、検査所見からは同菌による播種性ムーコル症が考えられた。特に耐性の強いCunninghamella属による播種性ムーコル症の報告が散見され、症例の集積が望まれる。
19	線虫症	Curr Res Parasitol Vector Borne Dis. 8(2025)100309	世界的に分布する腐生性線虫であるHalicephalobus属のうち、H. gingivalisは脊椎動物感染症を引き起こす。主にウマに感染し、9例のヒト症例と1例のウシ症例も報告されている。正確な感染経路は不明であるが、粘膜または皮膚病変が線虫の侵入点となり、その後血行性播種が起こると推定されている。1例では雌馬から仔馬への経乳腺感染が報告されている。中枢神経系への影響が最も多い。外科的除去および/または全身駆虫治療後に回復した限局性症例3例を除くほとんどのウマ症例と全てのヒト症例は死亡している。死後に線虫の形態学的特徴から診断されているが、分子データは不足しており、報告された症例の全てがH. gingivalisによるものかは不明である。ここでは経胎盤感染により2回連続して生殖障害が発生したウマの症例について報告する。2017年生まれのConnemara雌馬が2021年に健康な仔馬とともにアイルランドからドイツに輸入され、自然交配用の種雄馬を含む約30頭がいる馬匹飼育牧場に入った。牧場ではイベルメクチンまたはフェンベンダゾールとブラジカンテルを用いて、年に2-4回の定期的駆虫が行われた。この雌馬は2022年と2023年には健康な仔馬を出産した。2024年4月に死産し、死産した仔馬とその胎盤の病理学的検査を実施した。死産から回復した後、この雌馬は臨床徴候の異常を示さなかった。2024年5月にフェンベンダゾールで駆虫治療が行われた。正常な発情周期を再開した後、2024年7月に再び交配したが、11月末に流産した。胎児および胎盤の病理学的検査を再度実施した。1例目(死産)の胎盤の壊死病変内に線虫が存在し、死産した仔馬の腎臓と中枢神経系には線虫と好酸球を伴う多巣性肉芽腫性病変が認められた。2例目(流産)は自己融解の徴候が認められ、胎盤ならびに胎児の肝臓と肺に病変内線虫を伴う多巣性壊死が認められた。胎盤といくつかの組織から試料が採取され、1例目と2例目の胎盤試料からHalicephalobus種の配列が得られた。2つの配列は同一性100%で、ドイツのウマ由来H. gingivalis分離株Indigo S1342-13株と94%のヌクレオチド同一性を示した。この雌馬は流産7か月後も臨床的には健康だったが、最終的に播種が起こる可能性がある。また、過去の報告と同様に駆虫薬による治療は成功しなかったと考えられる。本報告は胎児期のHalicephalobus種感染の最初の報告であり、蠕虫がウマの流産の原因となった最初の報告である。Halicephalobus種感染は稀ではあるが有害な結果をもたらす、診断および治療上の難題をもたらす可能性がある。

ID	感染症(PT)	出典	概要
20	野兔病	Emerg Infect Dis. 31(2025)2284-2288	<p>Abstract</p> <p>ユタ州の新生児に神経侵襲性トウラレミアを診断した。この患児は、髄液で培養陰性の細胞増多症 (pleocytosis)、脳MRIで辺縁強調病変、そして血液中の微生物由来セルフリーDNA検査で <i>Francisella tularensis</i> が検出された。母体の病歴、血清学的検査、さらに卵管組織で免疫組織化学および16S rRNA遺伝子PCRにより <i>Francisella</i> 属が確認されたことから、先天性感染であることが強く支持される。本症例は、ヒトの先天性トウラレミアで初めて神経侵襲が確認された稀な事例で、cfDNA、免疫組織化学、16S rRNA PCRなど複数の分子診断法で確認されている。乳児は妊娠37週で帝王切開により出生し、出生時に短時間の呼吸補助を受けた後、2日目に退院。生後16日目に無気力と摂食不良で救急受診し、発熱・頻脈、白血球増多、CRP上昇、肝炎、リンパ球性髄液多細胞症を認め、アンピシリンとセフトラジムで治療。改善後退院したが、9日後に再び体調不良で再入院。MRIで視床や頭頂皮質に病変を確認し、cfDNA検査で <i>Francisella tularensis</i> を検出。神経侵襲性トウラレミアと診断され、シプロフロキサシンとゲンタマイシンによる治療を開始した。</p> <p>母体の経過: 妊娠34週、潰瘍性大腸炎治療中の母親が発熱や咽頭痛、結膜炎、頸部リンパ節腫脹を発症。CTでリンパ節炎が確認され、抗生物質やドレーナージ治療を受けた。母親は帝王切開時に卵管結紮術を受け、その際、左側卵管に広範な急性化膿性卵管炎と漿膜炎が偶発的に確認された。ホルマリン固定パラフィン包埋組織をCDCに送付し、免疫組織化学(IHC)で左卵管にコクサチリ型菌と壊死性炎症性残渣が認められ、<i>F. tularensis</i> 抗原が陽性であった。さらに、同組織から抽出したDNAで16S rRNA遺伝子PCRを実施した結果、<i>Francisella</i> 属が陽性となり、母体感染と垂直伝播が分子レベルで確認された。産後40日目、母親は乳児のトウラレミア診断を受けて感染症専門医を受診した。彼女は夜間の発汗、倦怠感、食欲不振が続いており、新たに手を中心とした広範な関節痛が出現していた。咽頭培養は陰性であったが、<i>F. tularensis</i> に対するIgGおよびIgM抗体検査は陽性だった。彼女はシプロフロキサシンを14日間投与され、その後、健康状態は基準値に戻った。</p> <p>家庭環境: 井戸水使用、畑や水路、ビーバーの生息地近接、ウサギ2羽、ネズミやモルモットを飼育する猫は直前に事故死。井戸水PCR陰性、他家族の抗体は陰性で、明確な感染源は特定されなかった。</p> <p>本症例は、ヒトで初めて分子レベルで確認された垂直伝播による先天性トウラレミアで、神経侵襲性を伴う非常に稀な事例である。診断にはcfDNA検査、MRI、免疫組織化学、16S rRNA PCRが用いられ、治療はシプロフロキサシンとゲンタマイシンで良好な経過を示した。感染源は不明であるが、家庭環境に野生動物や井戸水など複数のリスク要因があった。</p>
21	鳥インフルエンザ	J Dairy Sci. 109(2026)1891-1906	<p>米国の乳牛と家禽における高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)H5N1ウイルスのアウトブレイクは、感染した乳牛群および家禽群を扱う農場労働者への多数のスピルオーバーをもたらした。インフルエンザA型ウイルス(IAV)は動物とヒトの気道と腸管でよく複製されることが分かっているが、乳牛の乳腺におけるHPAI H5N1の継続的複製と継続的スピルオーバーの組み合わせは、HPAI H5N1ウイルスの哺乳類種への適応に関する懸念を提起する。以前の研究では、乳牛の乳腺におけるIAV特異的シアル酸(SA)受容体の存在が示されたが、他の動物種の乳腺におけるそれらの受容体の存在は調査されていない。本研究では、蛍光標識された <i>Sambucus nigra</i> レクチン(SA α 2,6-ガラクトース[gal]受容体に結合)と <i>Maackia amurensis</i> レクチン(SA α 2,3-gal受容体に結合)を用いたレクチン組織化学染色で、家畜動物種とヒトの乳房におけるSA受容体の存在を調べた。ヒツジ(泌乳2-6回)、ヤギ(乳汁分泌開始/泌乳2-6回)、アルパカ(若齢/泌乳2-8回)、肉牛(5-9歳)、非泌乳未経産牛(14-16週齢)、ホルスタイン種乳牛(多重産)、ブタ(産子数2以上)各3頭を安楽死させ、乳腺の乳頭槽、乳腺槽、小葉間導管、分泌腺房領域のホルマリン固定パラフィン包埋切片を採取した。ヒト乳腺については、市販業者から正常対照乳房組織スライドを入手し、さらにジョージメイソン大学(GMU)から非同定ホルマリン固定パラフィン包埋アーカイブ乳房組織を、GMUとアリゾナ州立大学の協議のうえでアーカイブ化組織ブロックを入手した。調査の結果、これら全ての種の乳腺で、哺乳類適応IAVの結合に不可欠なSA α 2,6-gal受容体が豊富であることを発見した。さらに、鳥類由来IAVとの親和性が高いSA α 2,3-gal受容体が、範囲は狭いが全ての種の乳腺に存在することも発見した。特筆すべきことに、A(H5N1)クレード2.3.4.4bウイルスが反弱動物(ウシ)と非反弱動物(ブタ)両方の乳腺組織に結合することが示された。本研究の結果から、IAVがウシ、ヒツジ、ヤギ、アルパカ、ブタ、ヒトの乳腺に結合する可能性があることが示唆された。実験環境と自然環境の両方で、これらの種の乳腺におけるIAVの持続的複製の可能性についてさらなる研究を行う必要がある。</p>
22	鳥インフルエンザ	ProMED-mail 20251116.8728787	<p>2025年11月上旬にインフルエンザの症状で入院したGrays Harborの1人の住民が、鳥インフルエンザの型であるインフルエンザA H5に感染していることが確認された。追加の検査でこのウイルスが、過去に動物で報告されているがヒトでは報告されたことのない鳥インフルエンザH5N5であることが示された。米国疾病管理予防センターとワシントン州保健局は、鳥インフルエンザによる公衆へのリスクは低いと考えている。この患者は基礎疾患のある高齢者で、入院したままである。患者は自宅で、野鳥との接触がある雑多な家禽集団を飼育していた。家禽や野鳥がウイルス曝露源である可能性が最も高いが、公衆衛生調査は継続中である。ワシントン州保健局は曝露と動物の健康に関する調査を完了するため、地域の保健局およびワシントン州農務局と協力している。公衆衛生疾患の専門家は、公衆へのリスクの増加を確認していない。鳥インフルエンザはインフルエンザA型ウイルスによって引き起こされる疾患で、世界中の野生の水鳥に自然に発生している。これらのウイルスは他の鳥類種や、時には哺乳類に感染する可能性があり、ニワトリやシチメンチョウなどの家禽に対して致死的となり得る。稀に、鳥インフルエンザウイルスがヒトに感染し疾患を引き起こすことがある。ほとんどの症例は、疾患の動物や感染した動物に曝露したヒトで発生する。米国で報告されているヒトの鳥インフルエンザ感染症例は軽症から重症まで幅があり、1人が死亡している。渡り鳥がウイルスを運び、商業的養鶏場や裏庭飼育集団などの家畜に感染させる可能性があるため、秋と冬に鳥インフルエンザのリスクが高まる。鳥インフルエンザのヒト-ヒト間の伝播は非常に稀で、米国ではこれまでに報告されたことがない。ヒト-ヒト感染が起きていないことを確認するため、公衆衛生当局は患者と濃厚な接触があった人全員に連絡を取り、症状をモニタリングし、必要に応じて検査と治療を行っている。</p>
23	鳥インフルエンザ	ProMED-mail 20251123.8728947	<p>ワシントン州保健局によると、Grays Harbor郡の住民がH5N5鳥インフルエンザ感染後に死亡した。患者は基礎疾患のある高齢者で、2025年11月初旬からKing郡で入院していた。家族のプライバシー保護のため、名前、性別、年齢を含む身元は明らかにされていない。これまでヒトにおけるH5N5感染は報告されたことがない。この感染症は併存疾患を有する高齢者の入院、その後の死亡を引き起こしたため、重要であると考えられる。疫学的に考えると、家禽か野鳥、いずれかの鳥類から感染したのは間違いない。死亡した患者は裏庭で雑多な家禽の群れを飼育しており、保健局のサンプリングでこの群れの周囲から鳥インフルエンザウイルスが検出された。「これは家禽、その周囲、または野鳥への曝露が感染源である可能性が最も高いことを示唆している」と保健当局は述べた。人から人への感染の可能性を防ぐために公衆衛生当局はこの群れおよび患者に接触した人の症状を監視しているが、現在のところ、そのような拡散の証拠はない。CDCによると、現在鳥インフルエンザの症例は全米で71例あり、Grays Harborの住民はアメリカで2例目の死亡例だった[1例目は2025年1月のH5N1鳥インフルエンザ症例]。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
24	鳥インフルエンザ	Washington State Department of Health (DOH). https://doh.wa.gov/newsroom/h5n5-avian-influenza-confirmed-grays-harbor-county-resident	インフルエンザの症状で入院していたグレイズハーバー郡の住民が、鳥インフルエンザの一種であるH5型インフルエンザに感染していることが確認された。追加の検査で、ウイルスはH5N5という鳥インフルエンザウイルスであることが判明した。この住民は、自宅の裏庭で家禽類を飼育しており、ウイルス曝露の原因は家禽や野生の鳥類が最も可能性が高い。公衆衛生当局はウイルスの発生源を調査し、患者と濃厚接触した可能性のある人々に連絡を取り、症状の有無を監視し、必要に応じて検査や治療を提供している。現時点では、一般市民へのリスクは低いと考えられているが、感染の可能性がある動物と接触する際には注意を払い、病気の鳥や死亡した鳥を発見した場合は、ワシントン州魚類野生生物局に報告するよう求めている。ヒトと鳥インフルエンザの両方のウイルスに感染すると、人から人へより容易に感染する鳥インフルエンザウイルスの出現につながる可能性があることから、同時に感染するリスクを減らすため、季節性インフルエンザワクチンの接種を推奨している。
25	鳥インフルエンザ	Washington State Department of Health. 14(2025)25-138	11月初旬にインフルエンザの症状で入院していたグレイズハーバー在住の方が、鳥インフルエンザの一種であるH5型インフルエンザに感染していることが確認されました。追加の検査では、ウイルスはH5N5という鳥インフルエンザウイルスであることが判明しました。これはこれまで動物で報告されたことがありましたが、人間では初めてのウイルスです。疾病対策センター(CDC)と保健省は現在、鳥インフルエンザによる一般市民へのリスクを低いと考えています。その人物は基礎疾患を抱えた高齢者で、現在も入院中です。被害者は自宅に野生の鳥にさらされた家禽の混合群を飼っています。家禽や野生の鳥類が最もウイルス曝露の発生源であり、しかし、公衆衛生の調査は継続中です。ワシントン州保健局は、地元保健局およびワシントン州農務局と協力し、曝露および動物の健康調査を完了しています。公衆衛生、疾病専門家は公衆に対するリスクの増加を指摘していません。参考: 2025.11.22追加情報(Profolus https://www.profolus.com/topics/washington-state-recorded-first-human-h5n5-bird-flu-infection-and-death/) ワシントン州保健当局は、2025年11月21日にH5N5鳥インフルエンザ株による初の人間感染が確認された後、高齢者の死亡を報告しました。この事件は重大な人獣共通感染症の発生となり、地域の医療施設や公衆衛生ネットワーク全体での監視強化を促しました。なお、その人物はグレイズハーバー郡出身です。H5N5はインフルエンザAウイルスの亜型で、鳥インフルエンザや鳥インフルエンザを引き起こす病気で、野生の水鳥に生息し、他の鳥類に感染することがあります。この亜型は非常に病原性の高い鳥インフルエンザと考えられていますが、ヒトの症例は依然として稀とされています。グレイズハーバー在住のこの人物が最初に知られている症例です。ワシントン州保健局によると、患者は自宅の裏庭で家禽を飼育しており、その一部は11月初旬に死亡しました。周辺環境検査で鳥インフルエンザの痕跡が確認され、直接接触が致死感染の最も妥当な感染経路であるという評価が強化されました。報告によると、患者は11月初旬の入院前に高熱、呼吸困難、混乱を発症しました。医療チームは抗ウイルス療法と診断のためのシーケンス解析を開始し、その後H5N5鳥インフルエンザが確認されました。当局は、基礎疾患が入院中の臨床経過に影響した可能性が高いと述べています。保健当局は、無防備な曝露を受けた可能性のある100人以上の医療従事者や接触者を監視しました。11月22日時点で二次感染は報告されていません。監視チームは、未検出の感染を示唆する異常を特定するため、症状の確認と検査を継続しています。連邦データによると、2024年から2025年にかけて米国でH5N1鳥インフルエンザによるヒト感染が70件確認されています。これらの症例のほとんどは、感染した家畜と直接接触した農業従事者に関連しています。保健機関は、H5N5がH5N1鳥インフルエンザ株よりも危険であるという証拠はないと述べています。世界的な監視記録によると、H5N5は2025年以前に北米、ヨーロッパ、アジアの野鳥や家禽の間で主に流行していました。研究者は、動物集団間での拡散により再集合を通じたウイルス進化が懸念されると指摘しています。ワシントン州の症例は、鳥インフルエンザ亜型に関連するリスクを強調しました。公衆衛生機関は、裏庭で家禽を飼育している住民に対し、病気が死亡した鳥を報告し、直接接触を避け、ペットが感染した動物に近づかないようにすることを呼びかけています。また、季節性インフルエンザワクチンの接種を推奨し、再集合型インフルエンザ変異株の発生を促進する可能性がある重複感染のリスクを減らすよう勧告しています。当局は、11月22日時点でヒトからヒトへの感染は検出されていないため、一般市民へのリスクは低いと繰り返し強調しました。また、監視、迅速な診断プラットフォーム、検査ネットワーク、透明性のある報告システムが、新しい鳥インフルエンザ株の広範な拡散を防ぐための重要な手段であると述べています。
26	鳥インフルエンザ	Washington State Department of Health. https://doh.wa.gov/newsroom/h5n5-avian-influenza-confirmed-grays-harbor-county-resident	情報源: Washington State Department of Health (DOH) 2025年11月初旬にインフルエンザ症状のため入院した米国ワシントン州グレイズハーバー郡の住民は、トリインフルエンザの一種であるA型インフルエンザウイルス(H5)に感染していることが確認された。追加の検査で、このウイルスはA型トリインフルエンザウイルス(H5N5)であり、これまでに動物で報告されていたが、ヒトへの感染は報告されなかったトリインフルエンザウイルスであることが確認された。本例は、自宅の裏庭で、野鳥に曝露した家禽の混群を飼っていた。家禽や野鳥がウイルスの曝露源である可能性が最も高いが、公衆衛生調査は進行中である。アメリカ疾病予防管理センター(CDC)とワシントン州保健局は、現在、トリインフルエンザによる公衆へのリスクは低いと考えている。
27	H1N1インフルエンザ	Wkly Epidemiol Rec. 42(2025) 469-482	2025年2月25日以降、散発的な人畜共通インフルエンザ感染が報告されており、症例の大部分は、感染したトリやブタまたは汚染された環境への曝露後に報告されている。メキシコとベトナムからA(H5N1)の単独症例が報告され、また中国からはベトナムへの最近の渡航歴のある1例においてA(H5N1)症例が報告された。バングラデシュから3例、インドから2例、カンボジアから15例のA(H5N1)症例が報告された。バングラデシュから1例のA(H5)症例が報告された。中国から24例のA(H9N2)症例と2例のA(H10N3)症例が報告された。ドイツから1例のA(H1N1)v症例が報告された。